

トトちゃんの心は北の海

——子アザラシと少年の愛の物語——

竹野 栄・作 清水 勝・絵



人間と動物♡愛のシリーズ

実際にあった、人間と動物
のあたたかいふれあいをえ
がいたシリーズ

◇生きるんだボンちゃん

中村ただし 文・写真

◇大五郎は天使のはねをつけた

大谷淳子・文 大谷英之・写真

◇白鳥の帰る湖 竹野 栄・文

◇ぼくとキキのアフリカ・サファリ

神戸俊平 文・写真

◇あべくさんの動物病院

竹野 栄・文

◇ボス猿バンゾウと仲間たち

岡村啓嗣 文・写真

◇麻薬探知犬シェリー（近刊）

岡村啓嗣 文・写真

（以下続刊）

（旺文社創作児童文学）

トちゃんの心は北の海

1986年1月8日 初版印刷

1986年1月14日 初版発行

作 竹 野 栄

絵 清 水 勝

発行人 赤 尾 一 夫

編集人 中 山 行 雄

印刷所 旺文社 日新印刷株式会社

開成印刷株式会社

製本所 株式会社 市川製本所

発行所 株式会社 旺 文 社

162 東京都新宿区横寺町

電話(編集)03-266-6372、(販売)03-266-6415

512107

© 竹野 栄 1986

（許可なしに転載、複製することを禁じます）

ISBN4-01-069480-7

Printed in Japan



落丁・乱丁本はおとりかえします
本社に直接お申し出ください

トトちゃんの心は北の海

——子アザラシと少年の愛の物語——

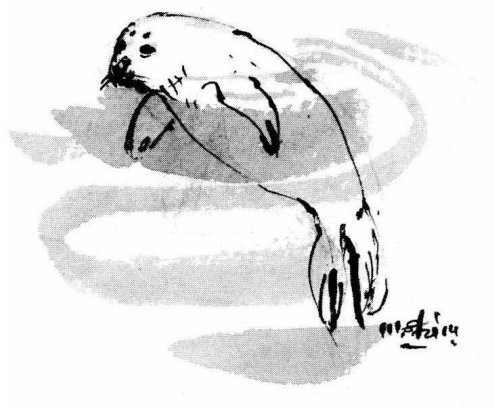
竹野 栄・作 清水 勝・絵



旺文社

装丁
さし絵
清水
勝

も
く
じ



一、つめたい海 7

二、白いかたまり 14

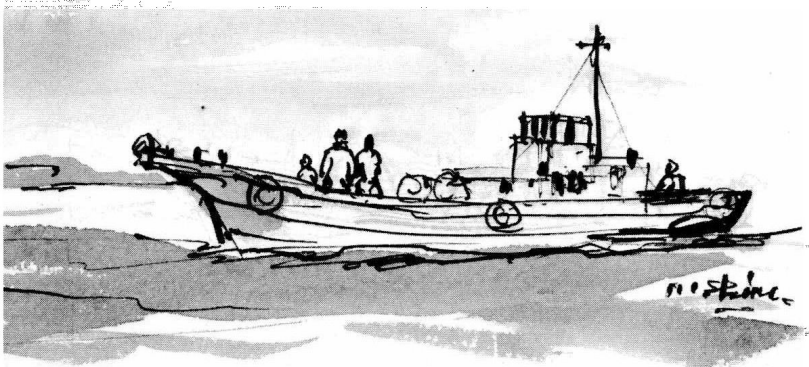
三、赤ひげ先生 25

四、包^{ほう}帯^{たい} 38

五、ミルク 46

六、一週間分のふん 55

七、トトちゃん 68



八、おはようございます

77

九、トトの行き先

91

十、ふしぎなもよう

104

十一、さようなら、トト

113

あとがき

123



一、つめたい海

とつくに五月にはいっているというのに、このへん、宮城県みやぎけんの牡鹿半島おしかはんとうのあたりの海は、まだまだつめたい。

この年の冬は、南も北も、日本じゅうが寒かった。この地方でも、春になってからも雪が降ふった。

「うわあつ、また、つもったっちゃ。」

と、喜よろこんでいた子どもたちも、しまいにはうんざりするほどなん回も降ふって、年よりたちは、

「こんな年は初めてだっちゃ。」

と、こぼすほどであった。

おかでは、まだ田んぼの種もみをまくことができないでいる。早くも、ことしはイネが育たないのではないかと心配されているが、海も同じであった。北の方からのつめたい流れが、いつまでも海の底をあらっている。

そのため、この地方の名産^{めいさん}であるホヤや、ウニ、アワビなどの育ちがずっとおくれた。中には実^みが死んでしまつて、からだけになつて散^ちらばっているものもある。

その上、こまつたことにもう一つ、ひどく漁^{りよう}のじゃまをするものがあつた。

「正^{ただし}、どうだなや……。」

岩場の近くに船を出していた旭丸^{あさひまる}の山田さんは、そのことが氣になつてしかたがない。海にもぐつて、底を調べていた若い衆^{わかしゅう}が上がってくると、待ちかねたように声をかけた。

いっしょに船に乗っていた幸太^{こうた}も、（どうだろうか）と若い衆^{わかしゅう}を見た。



幸太は港の小学校の五年生であつた。まだほやほやの五年生であるが、海がなによりも好きであつた。千メートルぐらいは、かるく泳ぐことができる。大きくなったら、父親のあとをついで漁師になるんだと、今から心にきめている。

きょうは日曜日で漁は休みであつたが、とっちゃんが、昼から、海のようにすを調べるというので、「おれも行ぐっちゃ。」と乗ってきたのであつた。

若い衆は潜水帽をとると、かるくなつた頭をよこにふりながら答えた。

「やっぱりよくないっちゃ。どっちを向いても、びっしりとこんぶがついている。からだにからまって思うように動けないし、ウニもホヤもよく見えないっちゃ。」

「ふうん、やっぱりなあ……。」

今、船をとめている所は、このへんで一ばんの漁場であつた。そのだいじな漁場が、船の上から見るとこんぶにおおわれている。これではこまると、念のため

二十メートル近くももぐって、岩かげなどを調べてもらったが、底の方もいっばいにおおわれているというのである。

暖^{あた}かくなると自然^{しぜん}に消^きえてなくなるが、寒くなるとはびこるこんぶであった。

こぶまきなどにして食べるものとは種類がちがい、かたくてまずく、とても食用にはならない。漁^{りよう}をするには、まず、かり取らなければいけないが、かり取ってもすてるしかないという、なんとも迷惑^{めいわく}な海の雑草^{ざっそう}であった。

「……しようがないなあ、あったかくなるまで待つしか手がないっちゃ。ま、きようはこれで帰るとするか。正^{ただし}、冷^ひえたらう、よくあったまれや。かぜをひかないように気をつけろ。」

山田さんは、若い衆^{わかしゆう}にそういって、帰りじたくにとりかかった。

そのとき、(せっかく来たのに……)と、心残りのように岩場の方を見ていた幸太^{こしろう}が、

「あれえっ。」

といって目を見張った。

今、岩に、なんだかわからないが白いかたまりが一つ、一生いっしょうけんめいにもがきながら、はい上がろうとしているのである。

（なんだってあんな岩に。……犬でもないし、めずらしいもんだなや。なんだっぺ……。）

だまっていられなくなつて、大きな声でいった。

「とっちゃん、とっちゃん、あれ見れっちゃ。ほら、あれ、なんだっ。」



二、白いかたまり

山田さんが、

「なに、おっ、ありゃあ……。」

と、みじかくいって見とれると、下を向いてガストروبでからだをあたためていた若い衆も、それに気がついた。

「あっ、なんだっぺ。」

と、思わず立ち上がり、口をあけてそれを見た。

白いかたまりは、なかなか岩にはい上がる事ができなかった。水から、からだの半分ほど上がったかと思うと、わずかばかりのうねりにもまれてすべるように落ちる。

うねりがひくと、またはい上がろうとする。

からだをおおっている白い毛には、少し銀色がまじっていた。それが、水にぬれて黒々とした岩にはい上がると、午後の太陽にてらされて、まぶしいくらいにきれいに見えた。とてもこのまま見のがしておけないほど、強く三人の気をひいた。

「とっちゃん、もう少しそばへよれば……。」

幸太こうたがいうと、山田さんも、

「うん、そうだな。もっとよせてみるか。」

と、うなづく。

波のある日は危険きけんであった。するどい岩が水の中にかくれている。よく知っている所でも気をつけないといけないが、さいわいきょうは静かにないでいる。山田さんはスピードを落として、少しずつ、少しずつ、近づいていった。

近づくにつれて、だんだんようすがはっきりしてきた。